Tea Room（ティールーム）

近代地震学スピンオフ －鯰絵と幕末－

大木（おおき）　聖子（さとこ）
（環境情報学部准教授）

こんなことを書いたら怒られてしまいそうだが，「メディアセンター」が「大学図書館」を意味していると知ったのは，慶應に着任して随分経ってからだった。さらに白状すると，湘南藤沢キャンパスだけが「メディアセンター」と呼んでいて，他のキャンパスでは「図書館」と呼んでいるのだろうと思っていた。

こんな筆者の前任地は東京大学地震研究所である。地震学者が集う研究所としては日本ではもちろん，世界でも最も規模が大きい。研究成果も世界一……と言うと世界各地から疑義が生じそうだが，誰も異論を唱えないのが地震研図書室の蔵書充実度だ。私の身長でも腰をかがめたくなるような低い天井に，上から下までびっしりと本が並べられている。こう書いているだけで，古書の香りや床のきしむ音が蘇ってくる。

日本は世界でも有数の地震大国だ。近代地震学は日本で始まり発展した，と言っても驚く人は少ないだろう。しかし，それを始めたのは開国とともに日本を訪れたお雇い外国人だった，というのはご存知だろうか。日本人にとっては馴染みの「なゐふる（地震）」も，お雇い外国人にとっては信じがたい現象だ。自分自身が揺れてしまうのに，いかに客観的に地の揺れを測るか，そもそも何が地を揺らしているのか，地の揺れ方にはパターンがあるのか。それらを研究し，発表し，論文にまとめて報告する，世界で最初の地震学会は，かくして日本で，最初から国際学会として誕生した。そういった史跡がつまっているのが地震研図書室だ。

他にも珍しいものがある。古書とは別のフロアーの施錠された部屋に，司書さんだけが白い手袋をして触ることのできる絵図「鯰絵」が所蔵されている。地震をナマズに例えたのは豊臣秀吉と言われているが，鯰絵自体は1855年の安政の江戸地震（首都直下地震）をきっかけに流行した。例えば「しんよし原大なまづゆらひ」という鯰絵には，真っ黒な大ナマズの上にまたがる人々が思い思いの台詞を吐きながらナマズに暴行（制裁）を加えている。右下には小ナマズがいて，そこには町の子供たちが，やはり同じようにナマズをこらしめている。当のナマズはと言うとケロリとした表情で，うれしいですなあ，もっと揺らしちゃおうかなあ，というような台詞を吐いている。タイトルに「しんよし原」とあるように，大ナマズに乗って懲らしめている華麗な衣装の女性たちは花魁で，ナマズの台詞はそこにもじってある。実際になんと書かれているか私が綴るのは憚られるので，気になった方はぜひ地震研図書室のデータベースからご覧いただきたい。

こういった鯰絵は当時の版画師が，自分自身も被災しながら描き上げたものだ。安政の江戸地震では，災害発生から２週間ほどで最初の一枚が描かれ，その後さまざまな絵柄が次々と発行されている。町の状況の記述がメインとなっているもの，ナマズが被災者を手当てしているもの，切腹したナマズの腹から溢れ出た金銀小判が人々に分け与えられているもの。そう，ナマズの描かれ方が，憎しみの対象から施しをくれるもの，さらには復興景気を与えてくれた有り難い存在へと変化していくのである。この間わずか２ヶ月。復興のスピード感が伺える。地震災害の捉え方へのあまりの潔さからは，新しい時代の訪れを待ち望む空気が漂ってくる。

私から見た福澤先生は，こんな時代を生きてこられた方だ。地震との関係をあらためて調べてみると，実に多くのご活動があった。中でも驚いたのは，災害発生時のメディア募金活動を定着させたのは福澤先生の『時事新報』だったという点だ。たとえば，1891年10月28日に発生した濃尾地震（国内最大規模の直下型地震）の際には，情報が錯乱する中にありながら翌々日には紙面で大々的に義援金を募集し，他の新聞社とは比較にならないほどの金額を集めている。それ以前に起きていた磐梯山噴火などでの義援金募集の経験を生かした素早い動きであった（都倉武之氏による『時事新報史』より）。

慶應義塾の歴史を想いつつ，令和の時代の地震学の新しいサイヤンスを築いていきたい。